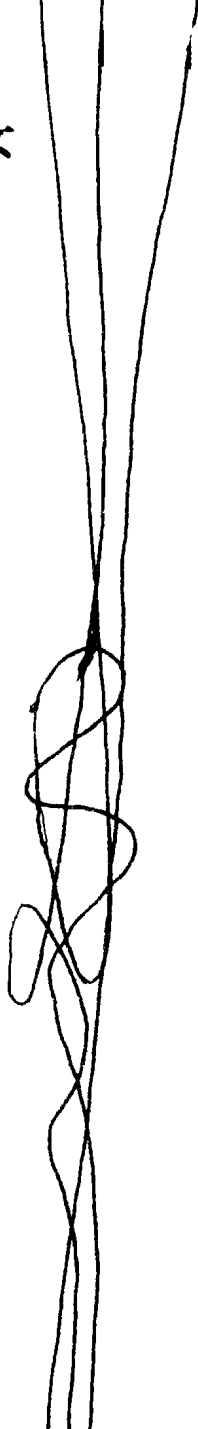


わたしが・棄てた・女

遠藤周作

わた
遠藤周作

く



講談社版

わたしが・棄てた・女

昭和四十四年八月二十八日 第一刷発行
昭和五十四年五月十日 第二十六刷発行

著者 遠藤周作

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 (〇三)九四五―一一二(大代表)

振替 東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 六八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。
©遠藤周作 昭和三十九年

Printed in Japan

0093-139277-2253 (3) (文1)

目次

ぼくの手記(一).....	四
ぼくの手記(二).....	二四
ぼくの手記(三).....	四五
手の首のアザ(一).....	六
ぼくの手記(四).....	二六

ぼくの手記(五)……………二二

ぼくの手記(六)……………二三

手の首のアザ(二)……………二五

手の首のアザ(三)……………二五

手の首のアザ(四)……………二五

手の首のアザ(五)……………二五

ぼくの手記(七)……………二五

装幀 丹阿弥丹波子

わたしが・棄てた・女

ぼくの手記 (一)

男やもめに蛆がわく……

むかしから言われてきた言葉だが、慎みぶかい読者姉妹はまさか、若い青年二人の下宿を、のぞかれたことはありますまい。彼等がいかに物ぐさで、その住む部屋がいかに乱雑で、臭気にみちているかをじかにかいで見たこともありますまい。

しかし、貴女にもし、遊学されている愛すべき兄弟、恋人がおありなら、ある日、突然、その下宿を奇襲されることをお奨めしましょう。襖をあけられた途端、あなたは、

「まア。いやッ。」

顔をあからめ、絶句なさるにちがいない。

この物語は、戦争が終って三年後の二人の若者の下宿からはじまるのだが、女性の読者を多少、辟易させる部分が出てきたとしても、それは必ずしも、こちらの罪ではない。当時、長島

繁男^{しげお}とぼくこと吉岡努^{よしおかつとむ}は、独身の学生だったのである。二人が共同生活を営んだ神田の下宿は、さすがに娼^{ぢやう}まではわかなかったが、夏には自慢できるほどノミがビヨーン、ビヨーン飛んでいた。神田の焼けあとや復興したばかりのバラックがみおろせるこの六畳は、それでも下宿難のあの時代に、敷金不要、権利金いらずで、見つけるのに随分、苦心したものだだった。

友人、長島繁男は名前だけでは当今の有名な野球選手を連想させるけれども、あのように逞しく、タフで、イカす青年を想像されては困る。彼が裸になると薄い胸に肋骨^{あばらほね}が哀れに浮きだすのは食糧難の学生生活のせい、長い間雑炊やスケソウダラしか食べさせられなかったためである。それから、ぼくの場合はもっと悪かった。ぼくは子供の時、軽い小児麻痺をわずらったから、瘦せている上に、右足が少し不自由だった。

二人とも学校にはあまり顔を出さなかった。戦後の田舎の事情で親の仕送りもほとんど当^{あた}にはできず、仕方なくアルバイトに忙しいというのが当時、大半の学生の生活だったが、我々もその例にもれなかった。アルバイトと言っても眼から鼻にぬけるような現在の学生がバンド演奏や学生重役で二万、三万とかせぐのとは違って、やっと出まわりだした電気製品やアルミ鍋を問屋から小売店に配達したり、宝くじやアイス・キャンデーを競輪場や海岸で売ったり、まあ、頭の角帽とはあまり似つかわしくない仕事、ぼくらのアルバイトだったのである。

(ゼニコがほしい、オナゴがほしい。)

いささか下品な文句で恐縮だが、これがぼくと長島との当時の心情だったと言ってよいだろう。ゼニコ——つまり金はないのは勿論だったが、靴下と共に一番、早く強くなったと言う若

女性^{おんな}は、素寒貧のバイト学生など鼻にもひっかけてくれなかったのである。

「ゼニコがほしいなあ。オナゴと遊びたいなあ。」

アルバイトのない日は、ぼくも長島も綿のはみ出た万年床でマスクをかけて寝そべり、そんな溜息をもらしていた。マスクをかけているのは別に風邪を引いたわけではなく、一ヵ月も掃除をしたことのない部屋は、一寸でも動くところとホコリが布団の間から煙のように巻きあがるのだ。だから物ぐさな我々には、マスクをする必要があったわけである。

あれは、秋晴れの、やけに美しい日差しが、ひびの入った窓からこれだけは豊かに流れこんでくる午後のことだった。どこかの遠い家のラジオで笠置シズ子の歌うブリウギがはつきりと聞えてくるほど、空気は澄んでいた。万年床の上であぐらをかきながら、二人は電熱器でこしらえたイモ雑炊をすすっていたが、雑炊のあまい匂いが、万年床からだだよう臭気とまじると、ふしぎに、母親の匂いをぼくに連想させた。空をくりぬいたような秋晴れの青さとこの匂いとは、人を感傷的にさせるものだ。

「おいおい。……それ、食わんのならこちらに寄こさんかい。」

うどん屋^{うどんや}からガメてきたドンブリを口にあてた長島は、物ほしげな眼でぼくの顔をみつめた。

「ばっけヤロ。さっきから二匙も余計についだくせに。」

「うむ。何時までもこんな生活をしてはいいかなア。身も心も……よごれていくような気がする。」

長島は意外にセンチなところがあって、この時もこんな話を急にしはじめた。

小さい頃、彼は山梨県に住んだそうだが、あの山国では秋になると葡萄つみがはじまる。棚にみのった葡萄の房が陽の光をうけて褐色の寶石のようにキラキラと光り、菅笠をかぶって脚半をはいた娘たちが手籠に葡萄を入れていくのだそうだ。

「娘たちは背をのぼして葡萄棚に手をのぼしよる。俺あ、そのころ子供だったがね。若い娘たちが背のびするたびに、着物の裾と脚半との間にのぞき見える真白い膝小僧をうつくしいなア、そう感じたもんだ。秋になると……なぜかいつもその時の膝小僧の白さを思いだす。」

箸を動かしながら、長島は、もう一度當時を心に甦らせているようだったが、ぼくの眼にも、着物と黒い脚半との間に真白な膝をのぞかせながら、秋の陽の下で背をのぼし葡萄をつんでいるピチピチした娘たちの姿がみえるようだった。そういう若い娘と一度でも葡萄つみができたら、どんなに幸福であろうか。

「ヤッ。いけねえ。バイトの時間だ。」長島は夢からわびしい現実に戻って、「娘よりもまず、金という毎日を忘れとったよ。」

あわてて立ちあがると彼は、油でにしまったような丹前をぬぎ捨てて、押入れにしまったただ一つの古行李に手をつっこんだ。

「きたないなあ。」

犬が土をほじくるように次々とすよごれたシャツやパンツを放りだして、

「あれエ。ましなのは一つもないのかい。お前あ、風呂屋に行っても体を洗わないからいけな

いな。」

実はばくも長島も、この古行李のなかによ、ごれものを放りこんでおく。共同生活の最初の頃は流石に自分は自分の下着を着用していたのだが、いつの間にかばくのシャツが彼のシャツとなり、彼のサルマタがばくのサルマタとなつてしまつた。その上、物ぐさな我々は、洗濯の手かづを省くため、一ヵ月も洗わぬ下着の山から、まだ、よごれのめだたぬものを次々とりだして着るといふ悪習慣がついている。（読者よ。顔をしかめないで頂きたい。だから、ばくはさきほど言つたのである。ばくたちだけでなく、あなたの御兄弟、恋人も……要するに男なんて一人暮しの時は、ほば、これとおなじことをやつておるのだ……）

長島と、薄陽のあたる御茶ノ水駅前の雑踏のなかで別れた。彼はこれからあるお屋敷町の邸宅に、犬の散歩という仕事をやりに行くのである。犬といっても馬鹿にはならない。長島の話によると、その邸で飼っているポインター犬は、バターやミルクの入った豪華な食事をあてがわれているようだ。戦後の日本人でも、持っている人はやはり、持っている。

ばくは駿河台をおりて全国学生援護協会の事務所まで出かけた。事務所といえはきこえはいが、バラック建ての小さな建物に学生たちがひっきりなしに出たり入ったりする場所である。しかし、この小さな事務所ではばくたちは安直な下宿を世話してもらつたり、あたらしいアルバイトを手に入れる。

事務所の前には、秋の弱い日ざしをあびてばくと同じように頬のこけおちた学生たちが並ん

でいた。まだ復員服をきて角帽をかむっている男、ボロボロの背広を着た男もみな学生なのだった。

列に入って事務所の壁にはりつけてあるバイトの仕事案内を見あげる。宮城前と芝浦で芝生のゴミ集め。これは賃金はいいがむかし小児麻痺にかかったばかりには、なかなか辛い仕事だった。宝くじ売りは労力のわりに金が入ってこないし、家庭教師の口はほとんど東大や一橋のような優秀大学の奴等に占領されてしまう。

思わず溜息をついた時、案内表の右端にちょっと目だたぬ形ではりつけてある小さな紙が目に入った。学生の申込みがあった紙には、係員が次々と朱筆で斜線を入れるのだが、これにはまだ赤インキについてはいなかった。

千葉県 桜町にて広告くぼり及び軽労働、日当賃金・二百円 交通費別

おそらくこの紙を他の学生も目につけたのだろうが、千葉県まで出かけると言う点で敬遠されたにちがいない。コッペパンやイモ雑炊で凹んだ腹には、千葉県の遠い田舎町までバイトに出かけるのは流石に億劫なのである。

（行くか、行かないか。）

ぼくはポケットに入った小さなサイコロを手の中にくわえてみた。何か決心がつきかねる時、いつもこのサイコロにたよる。戦後の学生としてぼくも自分の運命を自分の意志ではなく、外発的な偶然にまかせるあれだ気持と諦めがあった。サイコロの目は偶数と出たので、ぼくは事務の窓に首を入れた。

「ああ、これか。これはと……」

中年の係員は古びたペンを耳にはさんでカードをくった。

「スワン興業社、神田神保町三丁目の……こりゃア、あんまりまじめな会社じゃ、ないかもしれんよ。」

「はあ……まじめな会社でもふざけた会社でも良いんです。」

中年係員は一寸苦笑して、黙ったまま雇用主にわたす勤務表の書類を渡してくれた。

神保町三丁目は歩いて十五分とからない。この一画はやや戦災をまぬがれたのか、ふるびた家が一握りほどの場所に残っている。こわれた板塀の間から夕食を支度しているのか、薪をおったり七輪に火をつけている音がきこえ、ぼくの横を紙芝居の親爺がのろろと自転車を書いて通っていった。

「スワン興業社は何処でしょうか。」

子供をおぶって家の前にたっている中年のおばさんにたずねると、

「ワン興業だって。」

「ワンじゃない。スワンです。英語で白鳥って意味でしょう。」

「そんなの、この近くにあったかねえ。……十七番地なら、たしか、この裏のはずだけど……」

ぼくはまた七輪の煙がながれ、暗くなりだした路を紙芝居の親爺の自転車のもとからついていった。親爺は横町に折れ、一寸みると不動産屋のような一軒のきたない平家の前で自転車を転ころらせながらとまった。

その家がスワン興業社だった。こちらはこちらでスワン（白鳥）という名から白い洋館などを想い浮かべていたのだが、白鳥どころか、ゴミ溜から這いでた小鳥こどりのようにホコリでうすよごれた家だった。たてつけの悪い硝子戸をあける。土間に電話をおいた机が一つ、その机にオカっぱ頭の眼鏡をかけた男が、進駐軍の流れものらしい原色のズボンをはいた足をのせ、こちらを見た。

「金さん、金さん、物品はここにおきますで。」

紙芝居の親爺は自転車から運んできた商売用の絵を土間において、相手を金さんと呼んだ。どうやら、このオカっぱ頭は、戦後、東京に進出してきた第三国人らしい。

「ヨシ、ヨシ。あした、また来るか。」

親爺はうなずくと硝子戸をガタビシいわせながら出ていった。オカっぱ頭は鼻の穴に指を入れて中をかきまわしながら、

「それで、君は、なにかね。」

「実あ、アルバイトの広告を拝見したものですから。学生です。これが学生証です。」

「よし、わかった。君はカクセイ組合からきたのたる。」

「学生援護協会です。」

「よし、よし、しことは、広告くばりた。やるか。」

「やります。広告くばりでしょう。」

相手の発音にまきこまれて、こちらの日本語まで変になりそうだった。

「広告はそれだ。」

大きな金色の指輪をはめた指で、金さんがさした方向は土間の片隅においてあるポスターとチラシの束だった。このポスターとチラシの束を、明日、千葉県の桜町やその郊外の村々にはったり配って歩くというのが、ぼくの仕事らしい。一枚をもらって、ぼくは今日と明日との交通費百円をポケットに入れ、スワン興業社を出た。豆腐屋のラッパがどこかできこえ、みじめでわびしい気持だった。長島が今日雑炊をくいながら、身も心もよごれていくような気がすると言ったが、その言葉が急に心に甦ってきた。路を歩きながらチラシをみると、謄写版のインキでよごれた紙に下手糞な筆跡で、

「浅草の人気者、エノケンが歌う懐かしの名曲 東京のエノケン、遂に桜町に出演」と書いてある。

エノケンといえ、三歳の子供だって知っている。映画や演劇で活躍しているこの喜劇界の第一人者なら当然、六大都市の一流劇場で出演の契約があるにちがいない。いくら何でも千葉県の泥くさい田舎町に旅興行をうつとはまず考えられないことだ。

それに……まかり間違っても何かの慈善興行で片田舎で出演するとしても、その興行をスワン興業などというあのあやしげな事務所に委せる筈はあるまい。

(こりゃア、インチキにちげえねえぞ。)

ぼくはあの学生援護協会の頭にもう白いものの混じり^{*}だした中年の係員が、

「あんまり真面目な会社ではないかもしれん……」

と呟いたのを思いだした。

しかし真面目な会社だろうが、ふざけた会社だろうが、今のぼくには同じことだった。あのピラを桜町でまく仕事をやれば二百円のほかに交通費をもらえる。こちらにとつてはそれで充分なのである。神田の鈴蘭通りで、あのオカッパ頭の第三国人からもらった金で久しぶりにおでんと茶飯をくらうと下宿に戻った。長島は何処をほつき歩いているのか、まだ帰ってこない。体臭のしみこんだ布団にもぐりこんでぼくはねむれ儘に、彼が話した葡萄つみの娘たちのことをぼんやり思いうかべる。秋の陽の下で彼女たちの白い膝小僧は若いぼくの心に泉のようにしみるのだ。

翌朝十時ごろ、瘦せたロースト・チキンのような恰好で眠っている長島をそのままにして、ぼくは古いレインコートを着ると下宿を出た。

「なんだ。元気ないな。タイチ^ヨブか。」

オカッパ頭の金さんは、昨日と同じように大きな指輪をはめた指でチラシの束をさすと、
「それ、リュックにかついてな。この紙にかいてあるとこ、廻ってくるか」

桜町は市川からバスで一時間ほどのところらしい。その町の周辺の三つか、四つかの村を、チラシをまきながらまわるというのが仕事だった。これは相当な労働だ。二百円の日当ではひきあわぬと気づいたが、もうあとの祭だった。

「そりやそうと……」ぼくは一寸戸惑ったが、やはり、口に出した。「このチラシに書いてあ

ることは本当なんでしょうか。」

「ははア……ウソ思つか。」

細長い眼でぼくをチラッと見ると、金さんはうすら笑いを骨のとびでた頬にうかべた。それ以上、何も大きく必要はあるまい。

「じゃア……」

「チヨと、まで。」

こちらを丸めるつもりか、それとも憐れなバイト学生に仏心を起したのか、金さんは原色のズボンのポケットからラッキー・ストライクをだしてくれた。これもその着ている洋服と同様、どうやら進駐軍からの闇物資にちがいはあるまい。

たかがポスターとチラシと違って馬鹿にしたが、貸してもらったリュックは案外と背中に重い。小児麻痺を患った身には、こういう荷を背負うのは苦手である。御茶ノ水から、千葉にむかう国電は流石にこの時刻はすいているが、リュックをもったぼくは芋の買出しにみられたであろう。そう言えば、同じように風呂敷包や古リュックをかついだカツギ屋の連中が前の車に五、六人、乗りこんでいる。

市川の駅からバスに乗ると、長いバス道路がすぐ続いた。バス道路に一本、大きな松がそびえている。天然記念物の市川の松である。その横に映画館の看板がみえ、ペンキで池部良の顔が大きく描いてあった。バスはやがて左に折れ、街を離れるにしたがって、次第にゆれはじめた。榎や榎の林は今、秋の気配をいっぱい匂わしていた。栗は褐色に枯れて生気がなかった。